

## あとがき

当画廊恒例の現代人物肖像画展は今回で第8回目を迎える。昨年企画展がたて続けにあり、その機会を失したため、今回は50点といつもの出品点数のほぼ2倍を数えることとなった。出品作品は例によって、この2年間に折に触れ、機会を見つけて、出逢った作品のなかから私の好みによって選んだ作品である。

展示作品を作家別(生年順)にならべると、H・マチス(1)、P・クレー(4)、P・ピカソ(5)、G・ブラック(1)、M・デュシャン(1)、M・シャガール(1)、E・シーレ(1)、M・レイ(2)、M・エルンスト(1)、田中恭吉(1)、国吉康雄(1)、J・ミロ(5)、西脇順三郎(2)、M・カンピリ(1)、J・フォートリエ(1)、H・ムーア(1)、山口長男(2)、棟方志功(1)、瑛九(3)、ヴォルス(1)、P・アレシンスキー(1)、G・ホケ(1)、Y・クライン(1)、J・フォス(2)、M・ノイマン(5)、J・メッツェンジー(2)、J・C・ブレ(2)となる。カッコ内の数字は出品点数である。すなわち27名の作家による50点の展示作品ということになる。これを手法別に分類すると油彩3、水彩・ガッシュ・ドローイング15、版画(銅版、石版、木版、シルク)27、写真・フォトデッサン4、オブジェ1となり、版画が全体の半数を超える。

今回の展示作品について若干コメントをして置きたい。展示作品のうちもっとも製作年代の古いものはピカソのキュビズムの人物(カタログNo.6)で1909年の作品である。ついでH・マチスの婦人像1913年(No.1)、E・シーレのアーサー・レスレーの肖像1914年(No.14)、田中恭吉の光:萩原朔太郎「月に吠える」扉絵1915年(No.18)と続くが、4点とも格調の高い作品である。ヴォルス(No.36)の作品は人物かどうか判然としがたいところもあるが、私には人物に見えるので展示した。この作品のふるえるような細い線は名状しがたい興奮を私に与える。クレーの「大衆喜劇」(No.3)はL・ファイニンガーの旧蔵とされるもので——ク

レーとファイニンガーはともにバウハウスの教授であり交際があったことが想起される——エディションはわずか10部で、私も実物を見るのは今回が初めての、珍品である。珍しいといえば、瑛九の婦人像—瑛九夫人—油彩(No. 33)は小品ながら興味深い作品である。G・ホケ、J・メッツェンジーはオーストリアの作家で、昨夏、ザルツブルグを訪れた際見つけたものである。J・フォスは現在抽象絵画を画いているが、当初はNo.40, 41のような甚だ刻印的な特異なイメージの人物像を画いていたのは興味深い。ベルリンのM・ノイマン(No.42~46)、パリのJ・C・ブレ(No.49, 50)はともに私には大変気になる作家で、昨夏ノイマンにはフィレンツェで(彼はフィレンツェ市の絵画大賞を受け、1年間フィレンツェでアトリエを提供され、制作に励んでいた)、ブレにはパリのアトリエで逢って作品をみ、歓談した。ノイマンは今年5月、ブレは来年当画廊で展覧会の予定である。その他それぞれの作品についてコメントしたいが、たゞいまは省略する。

ところで、巻末に昨年一年の当画廊の展覧会の実績と今年の計画を一表にまとめているのでご覧いただきたい。昨年はアルバース、荒川修作、山田正亮、クリスト、ノーランドと大型の企画展が続き、息を抜く間がないほど忙しかったが、ともかく無事に展覧会を終えたことで一種の満足感、充実感を味っている。作家はじめ関係者——とりわけ作品をお買い上げいただいた皆様に厚く御礼申し上げる次第である。

昨年は3月に10日ばかりニューヨークへ行き、8月末から9月にかけて2週間強、ウィーン、ザルツブルグ、ヴェネツィア、フィレンツェ、パルマ、ローマ、パリと女房とともに旅をした。作家に逢い、画廊を訪ね、美術館をめぐり、展覧会を観るという旅であるが、色々新しい発見があって楽しい。ヨーロッパでは2軒の画廊主が日本の現代美術に興味をもち、交換展の希望が

述べられたのにはいささか驚いた。わが国の国際的な経済的地位の向上をみてそれとパラレルに日本の現代美術もきっと面白いに違いない、という考えが先方の根底にあるようである。顧みて、わが国の現代美術の状況は如何?と考えさせられたものである。

昨年11月に、K画廊のAさんが店を閉める事態に陥ったのはショックであった。Aさんは温厚な人柄で、現代美術が好きで、よく分る人であっただけに残念であった。環境が悪くて売れないのが原因か、或いは商売、経営となると人柄と現代美術へのラヴだけでは通用しないということか、などと推測したが、それにしても厳しいものではある、と心が痛んだ。社会的には新聞にも出ない小さな事件であるが、現代美術を扱っていた友人のことだけに改めて自分のことが問われているような気持になったのである。Aさんの再起を祈念するものである。

ところで最近つくづく感ずることのひとつは、おかねを持っているということ(ひとつの条件)、現代美術に対するラヴを持っているということ(これもひとつの条件)、このわずか2つの単純な条件であるが、それを合せ持つ人は少いという事実である。おかねとラヴ、またはおかね相應のラヴ、或いはラヴにはおかねがかかる、さらにはラヴにおかねを投ずることのムダさ加減ないしアホさ加減?等々さまざまざわめきが、さきほどの2つの条件の間にある隔絶した溪谷に満ち満ちている。その溪谷の大小深浅はその人により度合は異なるが、そのざわめきの谷に自分で架橋して渡る人はまだ少いのである。以上の2つの条件をうまくつなぎ合せ、橋渡しをすることはわれわれにとってもっとも重要な仕事のひとつである、と思う。つまりはしっかりした橋の架け方をみつけ、いい架橋屋になることであろう。私はそう思っている。

次に今年の展覧会の計画であるが、別表のとおり相当忙しい。企画展が続くために優良在庫!?をお見せする機会が少くなっている。

一工夫が必要だと考えている。

なお、1月21日から2月9日まで、パリのポンピドゥ・センター主催で瀧口修造展が開催される予定である。この展覧会には瀧口先生のドローイング、焼け焦しのドローイング、デカルコマニー、水彩等40点が展示される予定である。この催しは「日本前衛展」に関連する事業として行われるもので、一昨年7月の当画廊での瀧口修造展をアラン・ジュフロワ氏が観ていたことが開催のひとつの契機となっている。私としてはこれは是非とも観に行かねばと今から楽しみにしている。

来年1988年は早いもので当画廊は創立10周年を迎える。また私が20年間勤めた農林中央金庫を辞め、南画廊に入社し、この美術業界に身を投じて15年になる。それになんと私は60歳になる。このように歯切れのいい数字がならば来年にはぜひともユニークな面白い展覧会を開催したいと念願している。今年はその準備の年でもある。

今年もどうぞよろしく御指導、御鞭達、御支援のほどをお願い申し上げる次第である。

1987年1月12日

佐谷画廊 佐谷和彦